

スを含めた歯科漂白治療に関する専門的知識を習得することができた。

- 2) ホワイトニング実習に進んだ学生は、漂白用カスタムトレー作製過程の理解と技術の習得を行なうことができた。
- 3) ホームホワイトニングを自ら体験することにより、その漂白効果を評価法も含めて学習できた。
- 4) 患者に対するインフォームドコンセントやメンテナンスについて実際に体験し、その方法を習得することができた。
- 5) ホワイトニングにおける歯科衛生士の役割を理解することができた。

次年度はホワイトニング実習終了後に行なったアンケートを集計し、本教育法の効果と有用性を検証、教育方法の改善を行なっていく。また、実習で使用した各種漂白剤の漂白効果と副作用発現の状況を検討し、より効果的で安全性の高い薬剤を歯科漂白教育に導入していく予定である。

新しく開発した手指感覚訓練法の カリキュラムへの導入

江川 広子 (歯科衛生士学科)

1. 補助事業の取組状況

目的

歯石除去技術のさらなる向上を図るために、筆者らの考案した各種粗さのサンドペーパーの識別試験による指頭感覚訓練法 (2006年度第1回日本歯科衛生学会にて発表) を改善し、本法のカリキュラムへの導入を図る。

実験方法

- 1) 被験者 本学歯科衛生士学科1年生100人を学業成績、上・中・下位群に分け、その中からそれぞれ12人ずつ計36人を抽出した。さらにこれらを指頭感覚訓練を実施する被験群と実施しない対照群の各18人の2群に成績が均等になるように配分した。
- 2) 性格テスト 矢田部ギルフォード性格検査を被験者全員に行い、内向・平均・外向に分類した。
- 3) 指頭感覚訓練法の改善 識別試験を実施する前に被験群の学生に探針と各種サンドペーパーを貸与し、1週間所定の条件下で識別テストの自主トレーニングをさせた。なお識別試験は1週間隔で3回行い識別能を記録した。
- 4) 歯石除去法 被験群、対照群の両群に対し人工歯石顎模型を用い、通常にしたがって歯石除去を行い、スコア付けにより歯石除去効果を判定した。

- 5) 評価 識別試験成績 (被験群のみ) については、学業成績および性格との関係について調べ (ANOVA, $P < 0.05$)、また、歯石除去効果については被験群と対照群を比較検討した。

2. 補助事業の成果

1) 識別試験結果と学業成績との関係は、学業成績の上位群は自主トレーニングの効果が1回目で顕著に現れ、2回3回目の向上は緩徐であった。また、中位群では1回から2回3回と有意に向上したのに対し、下位群は1回から2回目は向上したが、2回3回の間には変化が認められなかった。

2) 識別試験と性格の関係では、内向・平均・外向群は、前述の学業成績の上・中・下群に極めて類似した動態を示した。

3) 歯石除去効果と学業成績および性格との関係は、両者ともに被験群が対照群に比べ優れており、特に上位群では被験群が有意に優れていた。

以上の結果から、筆者らの考案した指頭感覚訓練法は指先の感覚を鋭敏にし、歯石除去技術の向上に寄与することが分かった。今後、本法の効率的なカリキュラムへの導入を企画していく予定である。

歯科技工技術向上のための 手指訓練法の開発

丸山 満 (歯科技工士学科)

1. 補助事業の取組状況

指先の器用さ、指頭の感覚向上の訓練法を確立するために、器用さのベースラインを設定し、各種器用さ検査法の反復により作業能力が向上することを報告 (日本歯科技工学会第26回学術大会 2004年) している。

今年度は、器用さ検査・感覚検査と性格特性 (YG性格検査) および学業成績の相互関係について以下の実験を行った。

対象は本学歯科技工士学科1学年の32名を選んだ。器用さ検査法は、一般職業適性検査の手腕作業検査盤と指先器用検査盤を用いた。指先の器用さは組み合わせ検査と分解検査、手腕の器用さは差し込み検査 (手腕検査1)、差し替え検査 (手腕検査2) などを採用した。感覚検査は、指先の識別能検査としてサンドペーパーの細目 (#400 #600 #800 #1000 #1500)、粗目 (#120 #180 #240 #320 #400) の2群とし、それぞれの中間の粗さを基準に2種のペーパー間の識別回答の正解を得点化して評価した。性格特性はYG性格検査 (一般用) で判定し、行動傾向の外向型、平均型、内向型に分類した。学業成

績は優・良・可に分類し、それぞれの相互関係について検討した。統計処理はt-検定を用いた。

2. 補助事業の成果

1. 性格特性と各種器用さ検査および感覚検査

器用さ検査における指先の器用さは外向型が高く内向型が低値であった。手腕の器用さには有意差は認められず、内向型はいずれの検査でも低値を示した。感覚検査においては、それぞれの群で差が認められなかった。

2-① 学科成績と性格特性

指先の器用さ、手腕の器用さも差が認められない。感覚検査はそれぞれの群で差が認められない。

2-② 実習成績と性格特性

器用さ検査において指先の器用さは成績優、良が可よ

りも良好であったが、手腕の器用さには差が認められなかった。また、成績可はいずれの検査でも低値を示した。

感覚検査はそれぞれの群で差が認められなかった。しかし、細目は優・良・可の順に低下の傾向を示した。

3. 成績と性格特性はいずれも差が認められなかった。

器用さ検査では学科成績はいずれの検査も相関が認められなかった。実習成績は分解検査に、性格特性が組み合わせ検査に相関が認められた。しかし、感覚検査においてはいずれにおいても相関が認められなかった。指先の器用さには、実習成績と性格特性に関わりがあることが明らかとなった。

4. 今後は本法のカリキュラムへの導入について考えていく。